実践研究「国語」研究成果の概要

生徒が「おもしろい」と感じる国語の授業をめざして

－生徒の実態に合わせた言語活動とは－

長野県飯田工業高等学校　原　将俊

Ⅰ，テーマ設定の理由

この研究の出発点は，「生徒に国語をおもしろいと思ってもらう」ことだった。私は現在，定時制で講師として働いている。定時制に通う生徒は，様々な理由から学力が極端に低い場合が多い。そういった生徒は小中学校での学習をいずれかの段階でつまづき，年を追うごとに学習する意欲を低下させてきて，「国語はつまらない」と感じるようになったのではないかと考えた。そこで今回の研究は，生徒に国語をおもしろいと思ってもらうために，学習指導要領の指導事項を高等学校，中学校，小学校とさかのぼって生徒のつまづきはどこにあるかを探り，生徒の実態に合わせた授業を構想する研究を行うことにした。

Ⅱ，研究の内容

Ⅱ-１　授業対象としたクラスと定時制について

今回，長野県飯田工業高等学校定時制２年Ｐ組で研究授業を行った。クラス生徒数は１５名，全員が男子生徒である。

定時制は，主に昼間仕事に就き，終業後に夜間に学校に来て学習する生徒のために作られた課程である。そのため，基本的には夜間に授業をするもの（夜間部）が多い。しかし近年になって，全日制の課程に通いきれない，いわゆる不登校に近い生徒などが増えてきて，それらの生徒への対応の一環として定時制の課程が利用されてきているという現象もある。飯田工業高校定時制では，現在就業していない生徒の数は全体の三分の一程度である。

Ⅱ-２　授業の展開について

Ⅱ-２-１　生徒の実態把握とつける力について

まず生徒の実態把握であるが， 生徒の実態を見るために，定時制で行っている「生活体験作文」を活用した。本校定時制生徒の書いたそれを見ると，多くの生徒が学校や就業での体験を羅列するだけにとどまっており，主張らしいものが見られない。このことから，段落構成の学習が不十分であるために，主張に繋がる展開を考えることが出来ないのではないだろうかと考えた。

振り返って生徒の普段の姿をみると，例えば，小説文を読む授業で，物語の出来事を時系列に沿って並べ替える学習を行った時，順序にかかわる記述を見落とし，うまく並べ替えることができないという生徒が半数いた。この生徒たちがどのような力を身につけていれば，この小説を読むことができたのか，その力を学習指導要領に探ってみた。

そこで，学習指導要領をさかのぼってみた結果，小学校低学年「書くこと」の指導事項「イ　自分の考えが明確になるように，事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。」に行き着いた。ここで示されている「順序性」が，生徒たちにとって欠けている力なのではないと考え，「順序性」をつける力として設定した。

Ⅱ-２-２　授業について

生徒たちが実際に行った事柄は，定時制二年生が機械実習の授業で製作する「壁伝いロボット」の組立て説明書を製作した。組立て説明書を授業で取り上げたのは二つの理由がある。一つは，説明書，いわゆるアニュアルが，工業高校の生徒たちにとって非常に身近なものであり，在学中も卒業後でも，生活に深く関わると予想出来たからである。もう一つは，いわゆるマニュアル文という文章が，性質として「順序性」とのかかわりが強い文章であったため，「順序性」を学ぶ素材として適当だったためである。これら二つの理由からマニュアル文を授業で取り上げることに決めた。

単元の展開について，まず５時間の授業を三つの段階に分けた。

・第一次段階：マニュアル文（取扱説明書）の特性，構造を理解させる。（つける力の理解）

・第二次段階：生徒自身にマニュアル文を作らせ，第一次で学習した事柄を実際に使用させる。（実際に力をつける）

・第三次段階：第一次，第二次で学習した事柄を確認させる。（ついた力の確認）

以上のように単元を分け，授業を行った。

研究授業について，研究授業は５時間中２時間目に当たり，第二段階の一時間目に当たる。本時では，まず個人で「折り紙」を題材に順序を考え，次にグループでロボット組み立ての順序を話し合って考え，最後にグループ毎に考えた順序を発表し，違いについて，どうしてそう考えたのかを検討する，という活動を行った。

Ⅲ，成果と課題

生徒たちは，自分が何をすればよいかということをきちんと理解し，その必要感があれば，活動に意欲的に取り組む姿を見せてくれた。問題は生徒の実態の把握である。「つまらない」の原因は幾つかあるが，その一つとして，生徒の実態と学習内容のかい離がある。つまり，学習内容と生徒の必要感，実態が一致させれば，生徒はおのずと活動に集中する。この積み重ねが，「おもしろい」の一番の近道ではないだろうか。この研究の成果として，「生徒の実態把握の重要性」という点が挙げられる。生徒が何ができて何ができないのか，という生徒の実態が明らかになれば，つける力の設定も容易になるのではないだろうか。

次に課題についてであるが，単元においてもっとも重要だったのは，「順序性について考える」ことである。そこで「順序性」と考える手立てとして「マニュアルを作る」という活動を取り入れたが，この授業の中で重要視しなければならなかったのは，活動を通して生まれた意見を比較検討することだった。しかし，教師の側に言語活動を通してつける力について考えさせる手だてが不十分だったため，生徒が互いのマニュアルを比較検討し順序性について深く思考するところまで至らなかった。今後は，つける力と言語活動を関連づけた授業展開を課題としたい。